
ストライクウィッチーズ 魔女を守る天使

九十九迅雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストライクウィッチーズ 魔女を守る天使

【Nコード】

N2160Z

【作者名】

九十九迅雷

【あらすじ】

大日本帝国海軍の誇るエースパイロットの中でも最年少の22歳「ラバウルの天使」こと宮本靖中尉は1944年の7月、局地戦闘機紫電二一型、通称紫電改のテスト飛行中、エンジンの故障に見舞われ亡き者になってしまった。

天国で神に詫びられ彼が転生させられた世界は人類とネウロイの戦争が繰り広げられるストライクウィッチーズの世界だった。

今まで戦闘機乗りとして戦ってきた知識や記憶が残ったままの彼は

転生しても尚、持ち前の戦闘力を武器にネウロイに立ち向かう。

第0話 プロローグ（前書き）

衝動的に書いてみました。反省はしているが後悔は微塵もない。

第0話 プロローグ

「ここは何処なんだろう？」

気がつけば、私は周りが全部真っ白な空間に立っていた。多分だが、死んだんだろう。

私は宮本靖^{みやもとやすし}。1944年7月8日没。悲しいことに享年22歳だ。

生前は一応、凄い偉業を成し遂げたみたいなんだけど、最期はあっけなかったなあ…。

「目が覚めたようじゃの。宮本靖君」

……誰、この人？ 私の目の前には神父さんみたいな格好をして白い顎鬚に優しそうな雰囲気目の。何処か神々しい覇気の漂うお爺さんが突如現れた。

「なんと、おぬしは純朴なんじゃなあ。そう言って貰えてワシも嬉しい」

この人、読心術が使えるみたい。ますます凄い人だ。……今の状況からして、神様とかなのかな。

「ふおおおお。おぬしは察しが良いのう。いかにも…ワシはこの世界を司る神。ミカエルとでも名乗っておこうかの」

「そ、そうなんですか！」

「うむ。さて、おぬしには本当に詫びねばならんのじゃ」

……？ 神様、どうしたんだろう。

「実はの、お主の乗っていた紫電改…だったかの？ あの機体のエンジンにはワシの部下の所為で潰れてしまったんじゃよ」

「いえいえ、まあ死んだものは仕方ないですし、私みたいな未熟者が生きていてもそこまで永くは生きれなかったでしょう。神様やその部下さんが気に病まれることはないですよ」

事実、あの戦争ではもはや、帝国が勝てる要素が皆無に等しかった。

あと1年持つか持たないかだったろう。

「ふおつふおつふお。何を言うかの。撃墜数58機、25対1でも生還した“ラバウルの天使”は」

ラバウル…。生前、私が戦っていた場所で、凄惨な戦地の1つだ。でも、天使と言うあだ名はそこまで好きではなかった。

「本当にすまんかったの…。おぬしのような善良な人間を…。そうじゃ！ 君。転生してみる気はないかね？」

転…。生…？

「うむ、元いた世界とは別の世界に生を受けるんじゃ。おぬしにはもう1度好きに生きる権利があるからのう」

「じゃ、じゃあ。もう一度戦闘機に似たような物に乗れる世界に行きたいです！」

もう1度人生をやりなおせるのなら！

「ほう。何でじゃ？」

「私は、坂井さんや、笹井さんをはじめとする尊敬する方々にたくさん教えてもらいました。転生しても、この教えを大切にしたいんです」

笹井さんはもう亡くなってしまったから…余計にその思いが強まる気がした。

「じゃあ、ストライクウィッチーズの世界なんてどうじゃ？」

「すとかいくいつちーず、ですか？」

「うむ、知らないのも無理はないの。戦後数十年も後に書かれた作品じゃ。その世界には、おぬしが挙げた2人をはじめ、多くの搭乗員をモデルにした人物がある。…と言っても、みんな女性じゃが」

なんと…。ミカエルさんは説明を続ける。
「ネウロイという怪奇な生物と戦う女性達の物語なんじゃ。魔法を使つての、戦闘機に似た物を足に履いて動かすんじゃ」

その世界では人を殺さなくて良いんですね。

「そうじゃの。では、ワシはおぬしを気に入ったから、なにか才能を授けるぞい」

「い、良いんですか？」

「なに、遠慮せんで良い。元々はわしらの所為でおぬしが死んでしまったんじゃ。むしろこれくらいさせてくれんかの」

お言葉に甘えることにした。

「じゃあ、人の考えていることがわかるようにはなりませんか？」

「うむ。読心術じゃの。構わんよ。しかしどうしてじゃ？」

生前は鈍感な人間で通じてましたから……。

「じゃあもう1つはワシが勝手に、翼を授けるぞい。魔法力が切れたとき、これを使うと良い」

… ありがとうミカエルさん。

「ふおおおお。あ、ストライクウィッチーズでは固有魔法というものがあるぞい。なるべくおぬしの意向に沿ったものにしよう」

「じゃあ、集中力をあげる魔法があればそれでお願いしたいです」

「わかったぞい。じゃあ、そろそろ時間のようじゃ。次の人生はよく生きるんじやよ」

本当のお父さんのような人だったな。私の体を光が包みはじめた。

「ありがとうミカエルさん！ もしもう一度ここに来たら、今度は仲良くしてくださいね！！」

私はそう言った次の瞬間消えた。

「ふう、良い青年じゃったのお。戦争はむごいものじゃ…。なぜあんな天使のような子が、若くして死ぬんじやろうなあ……」

ミカエルさんの呟きが、僕に聞こえたはずもなかった。

第0話 プロローグ（後書き）

プロローグ長くなりました…。

オリ主紹介

【名前／読み】宮本靖／みやもとやすし

【年齢／誕生日】19歳／3月21日

【体格】172cm／60kg

【所属／階級】扶桑公国海軍／大尉

【愛機】A7M2烈風一型

【武器】九九式二号四型20mm機関銃、コルト・ガバメントM1911A1、ナイフ×12（袖などに隠している）

【服装】第二種軍装の上下（坂本さんの上着と同じ物）下には紺色のアンダーシャツとロングパンツを着用。

【固有魔法】『集中』靖曰く『フォーカス』ある一点のことに集中し、攻撃力を向上したり敵の攻撃を反射したりする。

【使い魔】鷹（懐かれた）

【トレードマーク】真ん中に赤い三日月、その右横に白い鷹、その左に天使の翼。

【容姿のイメージ】

19歳の割にかなり若く見えるあどけない容姿ため、サーニヤや芳佳と同じくらいの世代に見られる。髪の色は黒。長さは女性のセミロングくらいまであり、ワックスを付けてもいないのにふわりとしている。

パッチリとした碧眼が特徴的で、顔立ちは整っている。そのため女装しても似合うと思われる。

優しいような雰囲気を持っていて見る者を癒し、母性本能をくすぐる。前の世界では天使に例えられたりもしていた。

肌の色は男だがあまり日焼けしないので色白。ほっそりしてそうに見えて実は必要な筋肉はついている。

【声のイメージ】釘宮理恵（ハガレンのアルくらいの高さの声）

【備考】

生前、転生後共に神奈川県横浜市出身。

第二次世界大戦中の大日本帝国海軍では中尉を務めていた。若くして隊長を務めたこともある。

特攻には反対していて、実際に部下達が死んでいくのを見てトラウマになりかけた。

両親、弟2人、妹3人の家族は爆撃で全員亡くなっており、天涯孤独だった。

16歳の時にもう飛行機の乗り方は熟知していた為、22歳で1度亡くなるまで6年近く乗っていたことになる。

撃墜数は58で、昔は坂井氏や笹井氏に鍛えられていた。

動体視力が良く、瞬発力がある。また、坂井氏のリハビリ（昼間に星を探す）に付き合っていたため、実質視力は左右肉眼で10・0（11・0はある）。

青春をする前に戦争が始まったので恋愛経験などは一切なし。

新型局地戦闘機の紫電改五型のテスト飛行中、エンジントラブルで墜落し死去。

ミカエルの計らいで転生するが、その際は直された紫電改と生前の愛機だった零戦二一型が転生後16歳の誕生日に届く。

性格は子供っぽいと思われやすいが、実は視野を広く持っており、全体を包むような包容力を持つ。

純粋で優しく、周囲の人間から愛される性格。動物にも懐かれやすい。

転生後は誰もが平和に暮らせる世界を目指す。

第1話 転生したラバウルの天使（前書き）

第1話です。Wikipediaなどを参考に、武装や機体の型式を少し弄りました。

第1話 転生したラパウルの天使

んう……。ミカエルさんと別れてから、私はどうやら教えられた通りに転生してみたんだ。

17歳の時に生き別れた懐かしい両親の顔が私の目に入る。

「決めたぞ、お前の名前は靖だ！^{やすし} 世界を安泰にして人に安らぎを与えられるような男になれよ！」

母、サチに抱えられる私に対し、勢い良く名前を授けた父、勝。^{まさる}

私は長男だったので、もしかすると私の後に妹や弟が出来るかもしれない。

……。まあ、今の私はただの赤ん坊。気長に生きるとしよう。

キングクリムゾン！……………と言わなければいけない気がした。

私が生まれた1926年からもう11年が経った。

前世とは違って妹は1人だけ、私が6歳の時に誕生。「澄んだ花のように美しい人間になってほしい」という母さんのたつての願いで名前は花澄^{かすみ}に決定した。

実は前世の一番年の近かった妹と同じだ。生き別れた1人だと言うこともあり、私は素直に喜んでいた。

しかしそうめでたいことばかりではなかった。ついこの間にこのにほ：扶桑の近海、扶桑海に、ネウロイが襲撃して来たのだ。

ミカエルさんが言っていたのはこの生物のことだったか。

その戦いでは扶桑の勇敢なウィッチ達の活躍により、勝利を収めたとか。

…実際は今新聞で読んだだけなので詳しくは知らない。というか、そのときの私を見つめていた父の目が何処か不思議そうだった。

「なあ靖…」

私が生まれたときから豪快な性格だった父が、この時ばかりはおとなしく見える。

「なんでしよう、父さん」

「お前に大切な話をしなければいけないんだ」

父さんの目は真剣そのもの。自分の事を薄々知り始めた私には今から父が話そうとすることが読めた気がした。

ついこの間の扶桑海事変、ウィッチの存在、幼い頃から男なのに魔力を行使できる自分…。

この要素からして、話されることが予測できないのが不思議なくらいなのだ。

「世の中にはウィッチ、つまり魔女が存在している。魔力を使える女性のことだ。だが特別な例だつてあるに違いない…」

そう言つて父さんは私の方を見据えた。

「靖のように、男ながら魔法が使えるのも、あながち不思議ではないのかもしれないと俺は思うんだ…」

「はい」

「だから、この力は信頼の出来る人間にしか教えてはいけないぞ。世の中は変わったものをすぐに取り上げる傾向があるからだ」

父さんは一息ついて、また話し続ける。

「お前の名前の由来、世界を安泰にし、人に安らぎを与えるには、まだその力を知られる時じゃない。そのときまで我慢強く待て」

「はい！」

私はただ一度だけ、強く縦に首を振った。

「良い返事だ。お前にもそろそろ、飛行機の乗り方を教えてやりたいなあ。はっはっは」

緊張した空気が解け、父さんは高らかに笑う。私も釣られて微笑んだ。

第2話 靖14歳（前書き）

オリジナルかつアニメ以外は知らないので、違和感や相違点が多い
かもしれません。

ちなみに昨日はいつの間にか眠ってました（汗

第2話 靖14歳

14歳になった年のある日、私と父さんはうちの倉庫でストライカーの開発に乗り出していた。

実は父さんは宮菱重工の技術者だったのである。……いや、前世でも零戦の開発班に回っていたけどね。

実質、私が前世で58の撃墜数を記録したのはこの人に色々コツや癖を教えてもらっていたからだと考えている。

ただ、この世界ではストライカーの開発に力を入れていて戦闘機の開発は遅れてるんだとか。

九六式艦上戦闘機が九九式艦上戦闘機と言われていることには驚いたものだ。そして私の愛機の零戦や紫電はストライカーを指すらしい。

「なあ靖、今年完成した零式の後継のストライカーを考えているんだが、名前ってどんなのが良いと思う？」

零戦の後継機と言ったら1つしか思いつかなかった。

前世の世界では堀越さん（三菱の九六式艦戦と零戦を設計した技師）達の思いと熱意がこもったあの機体、烈風だ。

「烈風なんてどうです、父さん？」

敢えて言って見ることにした。

14歳みたいなセンスだとかは言わないでいただきたい。だって考えたのは私じゃないから。

「おお、それ良いな。じゃ、コイツは烈風って名前にしよか」

あっさり新しいストライカーの名称が決定した。そんな感じで良いのか父さんよ…。

……前世では、烈風の名は聞いたことがあるだけだった。

尉官仲間から紫電の方が断然良いと言われたりもしたもののだが、その真相を知る前に僕は死んでしまったからわからない。

第一、海軍の思惑に踊らされていたんじゃないのかと思う。あの頭の硬い人たちの集まりだ。

技術者の意見や熱意などを理解せず、暴力で済ましていただろう。ただ1つ思っていることと言えば、堀越さん達の三菱があそこで止まる筈がないということ。

たとえ紫電の生産を命令されても、あの人たちなら裏で烈風の開発に着手していたであろうと思う。

《その通りじゃよ靖君》

11年ぶりに懐かしい声だ。お久しぶりです、ミカエルさん。

《うむ。その烈風なんじゃがな、君が亡くなってからの8月に一度彼らは紫電改の生産を言い渡されたんじゃ》

やっぱりですか…。

《これからは君の脳内で登場するよ。色々と力になりたいしのお。ふおっふおっふお》

ありがとうございます、ミカエルさん…。

「お前がいつか世界に名を轟かすときに、こいつがお前の相棒であつてほしいからな」

そう言つて父さんは微笑み、私の頭をわしゃわしゃと雑に撫でた。もう私は決意していた。ネウロイと戦う事を…。

「父さん。そのことなんです…」

「？ どうしたんだ？」

言え、言うしかないんだ。

「私は海軍に入隊しようかと思っています」

その瞬間、父さんの目がカツと見開かれた。そしていつものような奥に優しさが見える眼差しを私に向ける。

「そうか、扶桑海軍変の記事を読んでいるお前の姿からして、大分覚悟はしていたんだが…」

……いつも以上に静かな口調で零していく父さん。

「ようし、だったら、お前の門出を盛大に祝ってやれるよう、なおさらこいつを完成させにやいかな！」

元気を取り戻り、私の右肩をバンバン叩いた。

「あ、でも、私っていうのはやめたほうが良いんじゃないか？」

少し考えてから父さんは提案して来た。

「？ 为什么呢？」

「男なら、私っていうのもなあと思って」

「そういうことならわかりました。じゃあ父さん、僕はもうすぐしたら海軍の試験を受けてくるよ」

前世でもこのぐらいの年齢で覚悟したんだっけなあ。

16歳から入学を認められる海軍兵学校に入学するのを決めたのも、たしか今と同じぐらいの年齢の頃だ。

2歳になったばかりの花澄の頭を撫でながら、思い出した。

第3話 父の急死を越えて（前書き）

貴様と俺とくは同期の桜
おなじ兵学校の庭に咲く

第3話 父の急死を越えて

海軍に男性魔女^{ウィッチ}、いや魔術師^{ウィザード}として入隊するとして、準備を始めないと…。

「にーに、にーに」

花澄があどけない表情で僕の服の裾をつかんでいた。頭をやさしめに撫でると気持ちよさそうにする。

……可愛いなあ。…前世でもこうやって僕に懐いてきてくれたんだよな……。

今度こそ家族を守って、皆が平和で、笑顔で暮らせる世界を創りたい…。

…今日は父さんは横須賀の方に出向いてるんだっけかな。海軍がどうとか言ってたけど。

…でも、母さんでさえ家事をしているから僕1人に花澄をまかせっきりってのはどうなんだろう？

まあ良いか。学校もないんだし、今日はゆっくりとしておこうか。

《ジリリリリリ！ ジリリリリリ！》

ん？ ……電話だ。

「はい、もしもし。宮本ですが。ああ、宮藤博士ですか。どうも靖です。………なんですって！？ 父さんが！？」

電話の相手は宮藤理論の提唱者であり、父さんと一緒にストライカーを開発していた人だ。

父さんに連れられて何度か会ったことがある。

って、そんな場合じゃない。なんだって父さんが交通事故にあった

！？

洗濯物を干していた母さんと呼んで、僕等は一目散に病院に駆けつけた。

《靖君、急ぐのじゃ！　これはかなり危険な状態じゃ！》

み、ミカエルさん…。

病室を確認してドアを開けると、確かに父さんは居た。が、いつものように元気で豪快な父さんの姿ではなかった。

至る所に包帯が巻かれていて、血の赤色が所々で滲んでいる。脇には宮藤博士が座っていたが、僕等を見るなり席を立て譲ってくれた。

父さんの先がもう長くないことが明らかに見えて、僕の視界には最悪の未来が過る。

「おお…。靖か…」

「貴方！　しっかりして！」

今にも涙声で泣き崩れそうな母さん。

呼吸も苦しそうなのに、何で喋ろうとするんだよ、父さん！！

「こんな親ですまんなあ…」

父さんももう死を覚悟しているようで、力を振り絞るかのように声を出していた。

「父さん、だめだよ！　もつと気を強く持つんだ！」

「ははっ…。そいつはちつときつい相談だなあ……」

なんで苦しいのに笑うんだよ…。

「世の中を安らかに。俺が実現できなかった夢を、果たしてくれ。

あと、花澄を頼んだ……。サチさん。短い間だったけどありがとう。俺は幸せ者だったなあ……」

父さんは先程の苦しそうな表情を一転させ、まるで眠るかのよう

目を閉じた。

「嘘だよ。父さんっ！ 父さん ！！」

「貴方、貴方！？」

……それから父さんが目を覚ますことは無かった。

病院から帰宅したが、母さんは泣き崩れてから放心状態になっていて暫く1人で部屋に居る。

僕はと言うと花澄の相手をしていた。前世に続いてこちらでも父さんを亡くすなんて……。

ふと扉をノックする音が聞こえた。

……誰だろう。

「やあ……。靖君」

そこに居たのは宮藤博士だった。

「宮藤博士……」

「君に渡したい物を持ってきたんだ」

真剣な目でそう言われたので、僕は迷わずに上げた。

「君のお父さんは、いつも君の事を話していたよ。あいつは本当に14歳なのかとか。俺の考えをわかって居るようだったね」

暗くなっていた僕を明るくしようとしていたのだろう。宮藤博士はそんなエピソードを話してくれた。

「そうでしたか……」

「うん、本題に入るんだが、靖君は男でありながら魔力が使えるんだってね」

父さんのことから、恐らく宮藤博士くらいにしか教えていなかったのだろう。

「ええ、公にはしていませんが、一応は使うことが出来ます」

「そうか、なら話は早いね。君のお父さんが開発したストライカーについてなんだけど」

小脇に抱えていた幅広めの茶封筒を出して、宮藤博士が説明を始めた。

そうか、もう完成しかけていたのか、烈風――型は。

「これは零式艦上戦闘脚の流れを組むものだけど、大きめの機体で重量も重いから、やっぱり女性が履くのは厳しいんだ。そこでなんだけど、君が一度履いて見ると言うことはできないかな？」

つまりは烈風のテスト飛行ということだろう。

でも、まだ海軍に入隊していない僕がそんなこと可能なのだろうか。「軍の件は大丈夫だ。彼は海軍に顔が通っていたから、開発者の息子ということならきっと大丈夫だよ」

宮藤博士は僕の考えを察したようだった。

……よし。僕は飛ぶことを決めた。

父さんの残した烈風を相棒に、世界に僕の力を示す時が、今なのか
もしれない。

第4話 烈風、空を翔ける（前書き）

最近友人が遊戯王にはまって、僕もしたいと思うんですけど。よくよく考えるとスターターデッキ買ってもらったことがあるだけで、今まで一度も対戦したことはありませんでした。友人とカードゲームする機会があるって幸せ。

第4話 烈風、空を翔ける

父さんが亡くなってから2週間が経った今、横須賀の海軍基地に居た。

父さんが魂を込めて作ったストライカーユニット、烈風のテスト飛行を実行する為だ。

宮藤博士に連れられハンガーに入ると、すでに整備兵の人が黙々と準備を進めていた。

……が、僕の姿を見て疑問を抱いたようだ。

「宮藤博士、彼は誰ですか？ 軍の関係者には見えませんが……」僕を見据えて訊ねた整備兵さん。

「ああ、彼は、亡き宮本の息子だよ」

宮藤博士が“宮本”という苗字を出した瞬間整備兵さんは驚いたように目を見開いた。

「そ、そうですか。宮本博士の息子さん……。道理でコイツも重たくてデカイ機体だと思いましたよ」

すぐに元の表情に戻し、微笑みを湛えながら烈風を撫でた。

その烈風を見ると、確かにこの機体は大きい。零式より一回りは大きい。

その分強力な魔導エンジンを搭載しているのだろう。

前世の記憶と父さんの話を辿ってみたが、たしか名前はA-20だったか。

堀越さんが「三菱純正の発動機だ」と興奮気味に話していたのが懐かしく感じる。

元々は誉エンジン（紫電改にもこの発動機が搭載されていた）が搭載される予定だったそうだが、堀越さん達の熱意が通ったらしい。

まあ、今はそれは置いておいておこうか。

整備兵さんに挨拶を済ませると、僕は暫く烈風を観察することにした。

「宮藤博士！」

暫くすると、ハンガーに眼帯をした黒髪ぱつっんの少女が姿を見せる。

新聞で写真を見た気がする……確か、坂本美緒という名前だった。階級は知らないけどね……。

「あれ、この少年は誰ですか？」

この流れも2回目だが、仕方は無いと思う。

「彼は宮本の息子さんだよ。公にはなっていないが、魔力を使える唯一の男だ」

坂本さんに宮藤博士が紹介してくれた。

「そうなんですか。自己紹介が遅れてすまないな。扶桑皇国海軍の坂本美緒少尉だ。君の父の宮本博士には色々世話になった」

「こちらこそ。宮本勝の息子、宮本靖です。色々父がお世話になったみたいで」

「うん、そうか。はっはっは。しかし、男性魔女ウィッチというのも珍しいな。ということは、これは靖が履くのか？」

早速下の名前で呼ばれているが、まあ自分自身親しまれるほうが好ましいし、嫌でもない。

坂本さんが烈風を指差して訊いて来た。

なんというか、坂井さんと姿が重なったのはきっと気のせいだろう、うん。

というかあの人も紫電改のテスト飛行をしてたし、前世ではまだ健在だし。

「ええ、父が僕に向けて作ったものらしいので、とりあえずは今日、宮藤博士に連れられてテスト飛行しに来ました」

ま、飛ぶのは初めてですがね。

「そうか、あ、私のことも下の名前で呼ぶと良いぞ。お前も海軍に入るんだろう?」

「ええ、そうですね。このまま順調に行けば海軍に入ることになると思います」

烈風さえ使いこなせば、入隊ということになるだろう。

「ん、そろそろ行かないといけない。宮藤博士、失礼します。靖! また今度会えたら良いな!」

さかも……美緒さんはそう言い残してハンガーを後にした。

そんな僕等の様子を見ていた宮藤博士の表情は何処か嬉しそうな優しい笑顔だ。

「宮藤博士、整備が完了しました!」

整備兵さんに声を掛けられ、その表情は真剣そうなもの変わる。

「よし! 靖君、いよいよだ。思いつき飛ぶと良いよ」

「はい!」

今の服装は長袖長ズボンの体操着、要するにジャージだ。動きやすいし問題も無い。

生まれて初めてストライカーユニットを履くが、これも問題は無さそうだ。

魔力を流し込むと、プロペラが現れて高速で回転してエキゾーストノートを刻みだす。

床に写される魔法陣がかなり大きなものだった。

「す、すごい魔力だ!」

宮藤博士でさえも、僕の魔力の大きさに驚いているみたいだ。

「宮本靖、烈風、発進します!!」

そう叫んでから、一直線にハンガーから飛び出した。

体が軽くて、フワリと浮いているような感じがして、体全体で受け

る春風が心地良い。
こんなことが体感できる男は世界で僕1人だけだと思つととてもワクワクする。

烈風は比較的重い機体なんだろうけど、さっき観察して予想した感覚とは全然違う。

こいつならグングンと上昇していけそうだ。

「……靖君！ 聞こえるかい！？ まず最初は上昇試験だ！」

宮藤博士の声が事前に渡されたインカムを通じて耳に入ってくる。

「はい！」

僕は力強く返事をした。

……施設の窓から先程出逢つた宮本靖という男が上昇して行く様子が見えた。

あんなに大きくて重そうなユニットを履きながらみるみるうちに上昇して行く。

「美緒、どうかしたの？」

隣に座る醇子に声を掛けられた。

「ああ、醇子、さっきハンガーで面白い奴に会ったんだ」

「へえ、じゃああれがその……って、男の人みたい」

「うん、あいつは宮本博士の息子で、世界でただ1人の魔力が使える男らしい」

私は醇子にさっきの靖とのことを聞かせた。醇子はやはり驚いた様子だった。

「でも、あんなに大きなユニットでもうあんな高さまで……」

言われて見ると、もう窓からは見えないくらいの高さまで、靖は到達しかけていた。

「はっはっは。本当に面白い奴だなあ。あいつは」

私はこのとき、何処か予感していた。靖と共に戦う日が来る事を。

上昇試験はぶつちぎりの高度を叩きだして成功を収めた。

零式よりも数段上の高さらしい。馬力のある烈風ならではかな。

周りを見渡すと、青々とした空が広がっている。

父さんが作った烈風と見る事で、父さんと一緒にみている気がした。これからは戦っていないといけない。

世界を安らかにするための、人々に安らぎを与えるための戦いを。

この空の景色はまだ始まりに過ぎない。

僕がこれから沢山目にするであろう景色の一番最初の景色だ。

雲ひとつ無い青空を、僕はしっかりと心に留めた……。

第4話 烈風、空を翔ける（後書き）

もっさんの階級はよくわからなかったので、とりあえず少尉ということにしておきました。

宮藤博士は靖の父がいたことで扶桑に少し帰郷していたということ
で…。

ではそろそろ眠ります。おやすみなさい… z z z z z ……。

第5話 海軍入隊：なの？（前書き）

体調はそこまでよくないけど執筆はします。
冬休みまであと1週間。w k t k

第5話 海軍入隊…なの？

結果から述べると、テスト飛行は大成功に終わった。

…… 僕自身の意見から言えば、前世でも現世でも三菱、こっちは宮菱の技術力は凄い。

海軍からテスト飛行に借り出された小福田少佐が興奮して「零戦の再来」と言っていたのが理解できる。

…… でも、前世ならこれを上回る戦闘機をアメリカが作っていそう
だ。

第一、帝国には資源が無いし、石油を取ってももはや天地の差。
勝つのは厳しかったろう。…… 小隊長もやっていたような僕が言っ
て良いことではないことなのだろうけど……。

ちなみに今はと言うと、ハンガーの中で烈風の点検をしていた。
なんで僕がやっているのかと言われると答えに困るのだが、実は父
さんの次にこのストライカーユニットをよく見ていたのは僕だと自
負している。

…… いやだって、家の倉庫で設計図とかも書くの手伝ったし、エン
ジンテストとかも父さんの代わりにやったりしてたし……。
だから実際はA-20の音はもう聞き慣れたんだよね。

「おお、ここに居たのか」

後ろの方から声がしたので振り返ると、テスト飛行前に出逢った美
緒さんが居た。

いや、正確にはもう1人。茶髪で少し巻き髪の女の人が居た。

…… いやわかつていさ。もしこの道を歩んだら関わってくるのが
女性ばかりだったことくらいはね……。

「ああ、坂本さん。どうもです」

ズボンにかけて置いたタオルで手についたオイルなどを拭きつつ返事をする。

「私のことは下の名前で良いと言っただろう」

少し呆れたような表情をした美緒さん。

「いえ、僕はまだ海軍の兵ではないですからね……。ところでそちらの方は？」

まあ、こう言う形式的な礼儀は大事だと思う。「親しき仲にもなんとやら」だ。

「まあ良い。こちらは一応私の友人である、竹井醇子少尉だ」

「竹井醇子少尉です。よろしくね、靖君」

竹井少尉は微笑みながら挨拶をしてくれた。大人っぽさがあってとても気品がある人だ。

……前世で言う笹井さんだな、多分。あの人は「ラバウルの貴公子」って異名を取っていた。

……でもあの人気性が激しかったから「軍鶏」とも呼ばれてたんだよね。……まさか、ね。

「宮本靖です。よろしく申し上げます。僕の名前をご存知のようですね？」

「ええ、さっき美緒から聞いたの。それで、さっき試験飛行を見てただけ、凄いわね」

美緒さんが話していたのか。それなら納得だ。

「うん、確かにあれは凄かったな。そのユニットは……烈風だったか？」

「はい。生前の父が作ったものです。零式の流れを組むものなんですけど、魔導エンジンや大きさが少し異なっていましたね」

それから少しの間、烈風について説明をした。

「靖君は何回か飛んだことがあるの？」

竹井さんが素朴な疑問をぶつけてきた。

「いえ……。お恥ずかしながら、今日のテスト飛行が初飛行ですね」とすると2人が驚いた様子を見せた。

「随分と慣れた飛行に見えたが、今日が初飛行だったのか……。それであれとは、やはりお前は面白い男だな！ はっはっは！」

「本当に凄いわね」

賞賛されて嬉しいのは事実である。

「でも、なんでまたこの歳で初めて飛んだの？」

「父に言われていて、自分のことは力が必要になるそのときまで隠しておくように言われていたんです」

「確かに、魔力が使える男性なんざ格好のネタだからな」

美緒さんが頷いて同意した。

「でも、つい先日父が急逝しまして、ネウロイとの大戦も始まってしまいましたから……。それで宮藤博士の提案に乗って飛行することにしたんです」

「しかし、ウィッチは常に命の危険が付きまとうぞ。覚悟はできているのか？」

美緒さんが真剣な表情で僕に尋ねた。そんなものすでに答えはつけている。

「死ぬ覚悟なら、とつくの昔に付けてきました」

正確には“前世で”なんだけども……。遠くを見て言った。が、どこか気まずい空気が流れる。

「まあ、簡単に死ぬことはしませんよ」

この空気を和らげる為に僕は2人に微笑みかけて言った。

「……？ そ、そうか！ なら問題はないな！ はっはっはっはっは！」

「……？？ そうね！ 良い心がけだと思うわ！」

美緒さんと竹井さんが頬を赤くして返してくれた。2人とも可愛いが、なんで頬を染めてるんだろうか……………？

《ふおっふおっふお。若いというのは良いのう。羨ましいわい》

ミカエルさん？ どうして貴方は楽しそうに傍観しているのですか…？

数日後……。

僕は正式に海軍に入隊したわけだが、まだまだ訓練が必要だし、学校も卒業していない。

そのため今は予備役という形で家に残っている。

階級はなにかわからないけど、特別ケースで便宜が図られているのか、いきなり少尉らしい。

……そんなことでいいのか？ 扶桑海軍。

ちなみに戦闘機の操縦が出来ることも評価に入っているらしい。

昔取った杵柄がここで出てくるとは思いもよらなかった。なので九式艦戦の操縦の練習など訓練などをするために、たまに横須賀に顔を見せることにしている。

この間は久しぶりに飛んだが、海軍兵学校の訓練以来の九六式だったので、少し懐かしい感じがした。

周囲の人も15とは思えないと賞賛してくれていたっけな…。

ネウロイの侵攻が激化して来たこともあるし、いつでも呼ばれたときに備えておこう……。

第5話 海軍入隊：なの？（後書き）

ジュンジュンの口調むずかしす。

いつの間にかお気に入り登録15件。ありがとうございます。
感想とかでもお気軽に書いていただけると嬉しいですね。

第6話 従兵の女の子（前書き）

この2日風邪でダウンしていました…。

作者は結構虚弱です。皆さんもお気をつけくださいまし。

あと、扶桑皇国でしたね。皇が公になってました。修正しときます。

第6話 従兵の女の子

「……………497つ……………498つ……………499つ……………500つ！……………」
ふう」

さて、僕は現在オリジナル特訓メニューの内の腕立て500回をしていたところだった。

いや、さらに厳密に言えば今丁度それが終わり小休止を入れている……………前世の海兵学校時代からこういう風に体を鍛えていたし、現世でもそれは続けて行くつもりだ。

《ふおおおお。体を鍛えるのは今のうちにしか出来ん。頑張るのじゃ》

とミカエルさんも仰っているし…。そうだ、ミカエルさん。質問が。

《ん、なんじゃないな？》

相手の心が読める能力っていつ開花するんですか？ 今の所まだ普通ですし。

《ふむ……………。君が16になってからと言うのはどうじゃろうか？》

ミカエルさんが慎重なのは重々に理解できている。相手の心が読めると言うことはとても危険であり、苦しいものだと思うのだ。

相手のトラウマや触れてほしく無い過去のことだって、自分が知りたいと思えば覗けてしまう。

これは見られる相手もそうだし、それを見る側にしだって、その本人と同じくらい悲しい事を体験してしまうことになる。

でも、僕はそれで良い。少しでもその人の悲しみを共有できるのな

ら……。

それをわかちあって、少しでも負担を減らしてあげられたらそれで良い。

例えそれが偽善であっても、文字通り人の為の善になるならば……。

16というのは、大人になり始めて行く節目の年齢になると思う。そう言う面を見てミカエルさんの考えは正しい。流石神様だ。

《ふおお。まあ、君の誕生日に特別なものと一緒に授けようとするかのう》

よし、小休止終わり。今度は腹筋でもするかなあ……。

「宮本さーん！　いらっしやいますかー！」

ん？　誰だろう。父関連で来る人も最近ではめっきり減ってきたところだし、まあ海軍関連かな。

僕は引き戸を開けた。

「はい。お待たせしましたって、美緒さんと竹井少尉じゃないですか。どうしたんですか？」

立っているのは美緒さんと竹井さん！？　……と、その後ろに第一種の軍服を着た少し小柄な女性がいた。歳は見る限りでは10代？

「おお、靖か。いや、お前に専属の従兵を連れてきたんだ。一飛曹、自己紹介を」

美緒さんに自己紹介を促され、その女性は上ずった声で返事をし、僕の前に立った。

「扶桑皇国海軍一飛曹の刈谷舞子かりやまいこです！　宮本少尉、これからよろ

しくお願いします！」

元気でハキハキと喋っているというよりはちよつと緊張している感じた。和人形のような艶のある黒いロングヘアが特徴的で、なんと言つか、これぞ撫子？ 可愛らしい。

というか、苗字だけで陸軍の整備の神様を思い浮かべちゃった。

「いえいえ、こちらこそ。扶桑皇国海軍所属の宮本靖少尉です。そんなに硬くならずに、気軽に話していただけると良いですね」

僕がそう言つと、刈谷一飛曹は落ち着いたようで一息ついた。

「ね、舞子。言ったでしょ？ 靖君は優しい人だつて」

竹井少尉が刈谷一飛曹の肩をとつてよしよしと撫でていた。

「すいません……。世界で1人の男性ウィッチと聞いたので、緊張してしまつて」

「まあ、立ち話もなんですし、上がってくださいよ」

女性に長時間立たせるわけにもいかない。

「にーに、おきゃくさん？」

すると花澄がいつの間にも僕の足にしがみついていた。

「ん、妹さんか？」

「ええ、花澄です。まだ4歳になったばかりですよ。ほら、花澄ちゃん、お姉さん達に挨拶しようか？」

撫でながら促すと、花澄は笑顔を見せた。

「みやもとかすみですっ」

「「「可愛いな（わね）（ですね）！！」」」」

3人が花澄の頭を撫でたりするとまた笑顔を見せた。

「よし、良く出来ました。じゃあ、そちらが和室になってますので、掛けといてください。お茶でも入れてきますから」

「粗茶ですが」

先程急須で入れたお茶を3人に振舞った。一応家には客用に緑茶があったので、それを使用した。

3人とも一先ずは茶碗を持って一息ついている。

「うん、おいしいな。ありがとう。靖は何でもできるのか？」

「……何でもって程でも無いですけど、まあ大概のことは人並みくらいには出来ると思いますよ」

まあ、前世からやってたこともあるし、人の2倍はできないといけないこともあるけど。

「そうか。器用なんだな」

「そうですか？ 生き方はかなり不器用ですよ」

僕が微笑み混じりに言ったところ3人とも笑ってくれた。

「家には靖君と花澄ちゃん以外にはいないの？」

「とこれは竹井少尉。」

「ええ、父は亡くなったので、母がいるんですけど、今は仕事で留守にしていますね」

「そう……。ごめんね？」

竹井少尉は悪い事を聞いたといった表情で謝った。

「いえ、気にしないでくださいよ」

笑って促すと、竹井少尉は少し赤くなって目を背けた。

「ところで、少尉は私達が訪ねるまで何をされてたんですか？」

「んー。花澄の相手をしながら訓練ってところですかね？」

「ほお、訓練か！ 感心だな。どんな感じのだ？」

美緒さんがすかさず食いついてきた。目が輝いて無いか？ この人

「まあ、筋トレを各500ずつで、後は剣道とかを練習していましたね」

「「500!?」「」」

「たいしたものだな。靖は剣道をするのか？」

美緒さんは刀を使う人だって聞いたことがあったな。

「ええ、まあ、実戦で使えるほど強くないですよ」

そんな他愛も無い事を喋りながら、今日の午後は過ぎて行った。

そういえば、この人たち遣欧艦隊じゃなかったっけ？ 今日には休暇でも貰ったのかな。

第6話 従兵の女の子（後書き）

中途半端っす。

第7話 唐突な遣欧艦隊への辞令と貞操の危機（前書き）

アニメ知識だけだと色々とむずかしす。

来週はイブですね。作者は1人寂しく過ごしますよ。

はっはっはっは………はぁ………。

第7話 唐突な遣欧艦隊への辞令と貞操の危機

「今日美緒さんと竹井少尉が来たのは刈谷一飛曹の紹介の付き添いだけって訳じゃないですね？」

ただでさえ遣欧艦隊所属の2人だ。忙しい中一飛曹の紹介だけで来るとは思えない。

「やっぱりわかるか。いやな、お前に辞令が出たので私と醇子で通達しに来たんだ」

辞令ですか？ そう返すと2人は頷いた。

「お前は魔術師と言うこともあって正式な所属はない。単独と言ったところだ。だが今回は私と醇子の所属する遣欧艦隊に配置されることになったんだ」

「ウィッチの数は多いほうが良いから、上もなるべく人員を派遣したいらしいの」

……と言うことはリバウに派遣されることになるのかな？

「お前には早く経験を積んでもらわないといけない。まあ習うより慣れるだな」

「そう言う配慮はありがたいですね」

理論より実践の方が幾分か得意でもある。

「まあもう1つの目的と言えば、お前がしっかりとした環境で生活しているか確認することだな。だらけていたら訓練でもつけてやろうと思ったが、その必要はなさそうだ」

高笑いしている美緒さん。なんともまあおそろしや……。

「宮藤博士もあの後ブリタニアに戻っているし、私達も後数日で戻らないといけないの」

竹井少尉がため息をついていた。暫しの休息というのも難しい。ネウロイは今こうしている内にも襲ってきているのだから。

「そう言えば」

何か思い出したように竹井少尉が僕の方を見た。

「靖君って美緒のことは下の名前で呼んでるけど、どうしてかしら？」

「？ そんなに気になることですかね？」

「ああ、私が下の名前で良いと言ったからだ。もう同じ海軍だしな」
美緒さんが僕の代わりにそう返す。

「そうなの……。じゃあ私も醇子って呼んでくれないかしら？」

「あ、私も舞子で結構ですよ！」

刈谷一飛曹もそれに加わる。

「竹井少尉と刈谷一飛曹が構わないのでしたらそうさせていただき
ましようか。僕のこともお好きに呼んでいただいていますし」

親しみの証拠として嬉しいし……。ね。自然と笑顔にもなる。

「うん、それでよし」

「じゃあ私も靖さんって呼びます」

2人は頬を軽く赤らめていた。……。なんでだろう。

「しかし、靖はいつも敬語なのだな。いくら私たちが先任だからと
言っても階級は変わらないぞ？」

「いえ、これが僕本来の喋り方ですから。まあ、昔は一人称が「私」
でしたけどね」

前世で小隊長を務めたときなどは私と言ったほうが喋りやすかった。
どうも僕に「俺」は似合わないらしい。

「お前が「私」を使っていると女性にも見えないことはないな。は
っはっは」

あ、地味に気にしているところ突かれた。

「ええ、そうね。顔も整っているし、女装も似合っんじゃない？」

「面白そうですね！ 靖さんの女装」

あらら、2人も便乗してきちゃった。母さんも居ない中で女性3人に女装を勧められると言うシニール過ぎるピンチ。

「そ、それはまた別の機会にでもしてもらえますか……」
僕の呟きは無力だった。……もうお婿にいけない……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160z/>

ストライクウィッチーズ 魔女を守る天使

2011年12月17日22時52分発行